

太宰治「きりぎりす」の一考察

―「背骨にしま」われた〈かつての自分〉―

山 田 佳 奈

はじめに

太宰治「きりぎりす」は、昭和十五（一九四〇）年十一月一日発行の「新潮」第三十七年第十一号、通巻四百三十四号の「創作」欄に発表された。『東京八景』に収録されて以後何度も再録されていることから、太宰にとって重要な作品であったことがわかる。脱稿時期は、山内祥史氏によって、昭和十五年九月二十三、四日頃までであったと推定されている（注¹）。当時三十一歳の太宰は、前年に結婚し、友人との交際も充実、原稿依頼も増えて、「女の決闘」、「駈込み訴へ」、「走れメロス」など、後に代表作となる作品をいくつも発表している。また、『女生徒』によって北村透谷賞の副賞牌を受けたのもこの年である（注²）。しかし、公私ともに充実する太宰とは裏腹に、時代は太平洋戦争へと向かっていた。

次に、「きりぎりす」の梗概を確認する。「きりぎりす」は、「二十四歳の妻「私」が、画家である夫「あなた」との「五年」にわたる結婚生活を語る、女性一人称語りの小説である。「おわかれ致します。」という言葉に始まり、語りは夫とのなれそめから結婚、そして結婚後の「貧乏」ながらも「楽し」かった時に及ぶ。しかし、夫が社会

的成功を得たことで夫婦間に亀裂が生じ、「きりぎりす」が登場する「先日」の夜の話を語り終る。

こうした内容を持つ「きりぎりす」は、これまでどのように読まれてきたのか。「きりぎりす」の同時代評は多く、なかでも平野謙と高見順の評価は、作品発表から七十年以上を経過した今でも、解釈の中心にある。口火を切った平野謙は、「きりぎりす」を次のように評価している（注³）。

作家精神の在りやうといふ点で私は太宰治の『きりぎりす』（新潮）を興味深く読んだ。ここにみられる反俗精神は、現在私どもでも伝へ聞く日本画壇のインフレ景気に対する諷刺といふやうな素材的意味を超えてゐる。（中略）今月の佳作であらう。氏が指摘した「反俗精神」は、以後「きりぎりす」を解釈する鍵となった。これに更なる解釈を加えたのが、高見順である（注⁴）。高見は、平野のいう「反俗精神」を詳しく解剖すべく「きりぎりす」を分析、「真の反俗精神といふ代物は、この小説みたいにさう手軽く簡単に、あしらへるものではない」として、妻を次のように解釈する。

美しい反俗精神とも見られるが、そしてその女はそのつもりにちがひないが、実はそれは女の醜悪なエゴチズムの変形なのだ。

エゴチズムの上に咲いた反俗精神、さう言つてもいい。夫への献身的な気持も、エゴチズムから出たもので、自己錯覚の献身である。そして、女は自分のエゴチズムを守らんがために、夫を「氣違ひ」呼ばはりして、去つて行く。

以後、妻の「エゴチズム」を指摘した高見の読みは、平野の評価と併せて「きりぎりす」解釈の基準となっている。

ここで確認しておくべきは、「反俗精神」をめぐるこうした読みを後押ししたのが、他でもない太宰治だったことである。「きりぎりす」発表から六年後の昭和二十一（一九四六）年に発行された作品集『玩具』の「あとがき」で、太宰は収録作の一つである「きりぎりす」について、次のように書いている^{注5}。

「きりぎりす」は、昭和十五年の秋に書いた。このころ少し私に収入があつた。千円ちかい金がまとまつて入つたのではなかつたかと思ふ。そんな経験は私にとつてははじめてであつたので非常に不安であつた。結局それは、すぐに使つてしまつたけれども、しかし、自分もこんな事では所謂「原稿商人」になつてしまふのではあるまいかと心配のあまり、つまり自戒の意味でこんな小説を書いてみた。この小説発表の後で、あれは文壇の流行作家何某を攻撃したものだ、などといふ噂も起つたやうであつたが、私はそんな何某などを相手になどしてやしない。

私の心の中の俗物根性をいましめただけの事なのである。

この発言について井原あや氏は、「先・同時代・評——「反俗」をめぐる評価を受けた後に発せられたものである」ことを忘れてはならないとし、「同時代評の力学とでも言うべきものが働いていたと見ることは出来ないだろうか」と提言している^{注6}。

このように、〈俗と反俗〉という構図が七十年以上支持されている理由の一つに、作家太宰治の関与がある。しかし、そこに読者が関わっていることも忘れてはならない。絵画ではあるが、芸術の分野で社会的成功をおさめ、世間になじんでいく「きりぎりす」の夫は、そのまま当時の太宰治に重なる。こうした伝記的事実を知る多くの読者が、無意識であつても太宰＝俗＝夫という先入観を持ち、はじめから妻に反俗を読んでしまうのである。加えて、夫に反発する妻は反俗だ、男性に比べて女性に感情的だという社会通念がその読みに拍車をかけている。しかし当の太宰は、先ほど引用した『玩具』の「あとがき」で、「私の心の中の俗物根性をいましめただけ」と発言しているのみである。換言すれば、積極的に妻の語りに反俗を読み取り、時に恐怖を覚えているのは、私たち読者の方なのである。こうした傾向を、読者自身が自覚しておくことは重要である。

以上が同時代評についてであるが、「きりぎりす」研究を推し進めた代表的な論者をさらに確認しておきたい。遠藤祐氏と井原あや氏の論である。

まず遠藤氏の論^{注7}は、作品解釈の基盤を作つて画期的であつた。作品本文を読み解くことを重視し、作品末尾の「こころぎ」と「きりぎりす」に具体的な解釈を与えたことは、後の研究に大きな影響を及ぼした。

また、井原氏の論は、「きりぎりす」に畳み込まれた〈時間〉を見つめ直^{注8}し、その時間を次のものだとする。ただし、妻が語つた年は、太宰が作品を執筆した一九四〇年に設定されている。

一九四〇（昭和十五）年という〈時間〉、それは「神武天皇即位から二六〇〇年目」に当たる（紀元二六〇〇年）という〈祝

祭」の時であった。祝賀や奉祝会といった（祝祭行為）によって、（紀元二六〇〇年）を祝い、改めて「天皇への忠誠」が意識され、国民が編成される（「時」）だったのである。

ここから、「あなた」が描いた「菊の花の絵」と「ラヂオ」が解釈され、「極めて（紀元二六〇〇年）的な（国民）表象」として夫が評価される。さらに、その夫と妻が別れることから、「（国民）に同化することへの拒否」が示されていると氏は論じている。以上、作品解釈に時代背景を取り入れた点、さらに夫について解釈を加えている点で、氏の論もまた大きな影響を与えた。

以上が、「きりぎりす」研究の概要である。

一、先行研究の共通基盤

「はじめに」で述べた通り、「きりぎりす」の代表的な論考には、同時代評、一九九七年に発表された遠藤氏、二〇〇八年に発表された井原氏の論がある。一見ばらばらに思えるこれらの論に、共通の枠組みを見出すことは可能だろうか。それは「きりぎりす」研究の急所でもある。本章ではこの点について検討していく。

まず、同時代評である。平野の「反俗精神」は、高見によって更に解釈が進み、妻のエゴイズムが指摘されたことは前述の通りである。平野の評価は「反俗精神」にのみ触れたものであるため、ここでは高見について分析を進める。高見は、妻のエゴイズムを次のように説明している。その一部を引用する。

「おわかれ致します。あなたは、嘘ばかりついてみました」
これが書き出しである。かういふ強気の愛想尽かしをズバリと

言つてのける、私の強い女である。（中略）「お金が本当に何も無くなつた時には、自分のありつたけの力を、ためす事が出来て、とても張り合ひがありました」女はかう書いてゐる。自分の力をためす事ができる喜び。夫への献身ではなく、自分本位の気持なのだ。夫が純粹に芸術に精進してくれるそのことが妻の自分にもうれいといふのではなくて、自分の自我至上主義を満足させることができる点でうれしいのだ。

傍線部に注目していただきたい。まず高見は、傍線部に示した通り、妻の言葉を引用する。そして、妻のその言葉が、夫からすれば、エゴイズムの表われであると解釈する。高見は、この論法を重ねることで妻の「醜惡なエゴチズム」を指摘し、妻が「夫を『氣違ひ』呼ばはりして、去つて行く」と説明する。つまり高見は、夫を通して妻の語りを解釈するという枠組みを用いている。

次に遠藤氏である。氏は作品に流れる時間を特定し、そこから、妻が「何ひとつ記していない」一年を導き出す。さらにその一年は、妻が「耐え忍」んだ「自己犠牲の年」と論じている。また妻の忍耐の時はそれだけにとどまらず、「ことし」一九四〇年の正月から手紙執筆の「いま」にいたる九か月についても、「耐え続けたトキにはかならない」と指摘している。ここから氏が導き出すのは、「あなた」とともにした五年半の最後の月日を、（私）が、どれほどの《重荷》を負い、いかに苦しみつつ、すごしたか」ということだ。その結果が、夫との「離縁」である。このように、遠藤氏の論は、夫が妻に苦勞をかけたことが「離縁」をよんだとする解釈である。これも、夫を通して妻の語りを解釈している点で、同時代評と同じ枠組みを持っている。

では、最後に井原氏についても確認しておこう。氏は、前述の通り、妻の語りが「天皇への忠誠」が意識され、国民が編成される〈時〉に語られていることに注目し、「国家」に同化する夫を妻が「拒否」したために、夫婦は別れたと論じている。つまり、夫が「国家」寄りになったことが、妻に別れを決意させたという解釈である。ここでも、同時代評や遠藤氏と同様、夫を通して妻の語りが解釈されていることがわかる。

以上考察してきた通り、「きりぎりす」の代表的な論考は、すべて〈夫を通して〉妻の語りが解釈されている。これが、先行研究の共通基盤だ。では、〈夫を通して〉妻の語りを見直すと、作品はどのような一面をみせるのだろうか。それは、妻の語りが、誰のためでもなく〈妻自身のための語り〉であることの検討でもある。次にこの点を考察していく。

二、〈妻自身のための語り〉という可能性

本章では、前述の〈妻自身のための語り〉が、検討に値する問いであるかを見極めていく。

まず、妻の語りは夫に伝達しているかという問題である。

この問題は、意外なほど確定が難しい。高見順は、「きりぎりす」の形式について、「女の手紙の形式を取つてゐる」と述べている。高見のように妻の語りを「手紙」だとして、その手紙が夫に送られて、それを夫が読んでいると考える読者は多い。遠藤氏も妻の語りを「離縁状」だとしつつ、次のような指摘もしている。

手紙は本文だけで、書かれた日付けも書き手の自署も、受け手

の名前もない。つまり書式は完結していないわけだ。

氏が述べる通り、妻の語りには差出人も受取人も明記されておらず、頭語や結語もないうえ日付もない。その事実、遠藤氏が言うように「書式は完結していない」と考えることもできるが、一方で、はじめから夫に届ける気のない手紙だった可能性を示している。念のため、太宰の他の書簡体小説を確認してみても、例えば「きりぎりす」発表以前の昭和十一年七月一日発行の「文学界」に発表された「虚構の春」では、差出人と受取人、頭語と結語、日付が確認できる(注8)。また、「きりぎりす」発表以後の書簡体小説に「パンドラの匣」があるが、昭和二十年十月二十日発行の「河北新報」と「東奥日報」の「次の小説予告／パンドラの匣」欄に掲げた「作者の言葉」で、太宰は「手紙の形式の小説は、これまでの新聞小説には前例が少かつたのではなからうかと思はれる」、「手紙の形式はまた、現実感が濃いので、昔から外国に於いても日本に於いても、多くの作者に依つて試みられて来たものである」と述べている(注9)。「きりぎりす」発表以後とはいえ、この言葉からは書簡体形式に太宰が意識的であつたことが読みとれる。ちなみに「パンドラの匣」でも日付が、昭和二十二年一月一日発行の「群像」に発表された書簡体小説「トカントン」においても頭語と結語が、用いられている(注10)。ここまで確認して来た通り、妻の語りが手紙なのか、たとえば手紙であつたとしても、夫に届いたかどうかは確定できない。この点について、妻は何も語っていないからである。このことを指摘したのは、管見によるところ佐藤厚子氏だけである(注11)。氏は次のように述べている。

これが夫に対して直接に語りかける言葉なのか、夫に宛てて書

かれた手紙であるというのか、具体的な状況を表す設定は特になされていない。だが、その曖昧さは、むしろ意識的に選び取られた方法であろう。この作品において、語り手と相手との距離や互いの位置関係を決定するのはあくまでも語り手の主観であり、客観的・物理的な条件は無関係である。ここでは、語り手の意識に相手の占める位置、あるいは相手との心理的距離だけが意味を持つのである。

佐藤氏が指摘する通り、妻の語りが夫に向けて直接語りかけられていても問題はない。しかしそれもまた妻の語りからは読みとれず、確定できない。

以上のように、妻の語りが手紙なのか直接語られたものなのか、夫に語りの内容が届いたのかそうでないのかを妻は語っていない。それはまた、太宰によつて意識的に選び取られた「きりぎりす」の形式でもある。だからこそ、誰かに届けるつもりのない語り、つまり「妻自身のための語り」である可能性は非常に高いと考えられる。さらに別の視点から、その可能性の高さを述べたい。それは、妻の語りが時系列に沿って整理されていることである。妻の語りは、夫とのなれそめから結婚、そして結婚後の幸せな生活へと続く。しかしその後、夫の成功で亀裂が生じ、徐々に夫婦の亀裂は大きくなつて、妻はついに別れを決意する。このように、妻の語りは時間に沿ってきつちりと整理されている。

また、妻が夫と別れることを決意したのは「ことしのお正月」、岡井先生を訪問した日だった。この時の妻の言葉は、「あなたは、卑劣です」「あなたは、気違いです」「人間の誇りが、一体、どこへ行ったでしょう」と痛烈なものである。その後、妻の語りは「先

日」の夫の「ラジオ放送」を聞いた日に及ぶ。ここでは妻の感情の昂ぶりは最高潮に達し、「不潔に濁った声」「くだらない」「一体、何になったお積りなのでしょう」「恥じて下さい」「あなたは早く躰いたら、いいのだ」と、罵倒ともいえる言葉が並ぶ。ここで思い出しておきたいことは、妻の語りが「おわかれ致します」から始まることである。つまり、妻はこれらの地点と同様の心境で語り始めていたことになる。しかし、語りの冒頭は落ちついており、興奮を抑えきれずに語っているようには到底思えない。

これらは何を意味しているのか。それは、語りの地点が「先日」の「ラジオ放送」の日より後で、しかも、妻が自らの気持と出来事を整理したうえで語り始めたということである（注12）。この考えは、冒頭と末尾でお別れという結論が変わらないこと、夫の発言や態度、そしてエピソードが具体的に配置されていることから確かである。

以上のように、妻の語りが「妻自身のための語り」であった可能性は非常に高い。では妻は、そこで何を語つたのだろうか。次章では、妻の語りを見直すことでこの点を明らかにし、「妻自身のための語り」であることを確かなものとしていく。

三、妻が語ったこと

本章では、妻の語りを分析する。便宜上、語られた順番のまま、内容から妻の語りを四つに分けて、それぞれの区切りごとに考察していく。その区切りは、①「夫とのなれそめから結婚」、②「幸せな結婚生活」、③「夫の成功で生じた夫婦の亀裂」、④「別れの決意」

とする。ただし、冒頭から「五年になります。」までは、想定されている語りの地点の関係から、④で触れることとする。また、各区切りには、それぞれ想定されている（いま）があるが、実際の語りの地点と区別するため、「想定されている語りの地点」として示していく。

①（夫とのなれそめから結婚）

①は、「十九の春に見合いをして、」から「私は、ほとんど身一つで、あなたのところへ参りました。」までの部分にあたる。そこで妻は、夫とのなれそめを語る。後に妻となる「私」は、「十九の春」に後の夫である「あなた」と見合いをしたが、家族から反対され、他に良い縁談もあったため、結婚は難しいかと思われた。しかし、「私」は「あなた」の絵を見て、「あなた」と結婚することを決め、自ら結婚話を進めていく。結果「とうとう私が勝ち」、「ほとんど身一つで、あなたのところへ参りました」と妻は語っている。

しかし、こうした内容にひきずられて、①で想定されている語りの地点を、夫への愛情に満ちた時だと考えるのは誤りである。なぜなら①では、「いまの、あなたの御出世も、但馬さんのお蔭よ」という言葉が登場しているからである。つまり、①における（いま）は、既に夫が出世している時であり、①で想定されている語りの地点は、離婚を考えながらも決心がつかない時であるとわかる。さらに、夫に対する妻の思いから、語りの地点を限定しておきたい。

①では、「その時のことを、あなたにお話申したかしら。」といったように、夫の返答を期待した言葉が多く見られる。それは、夫に対する妻の甘えの表れである。しかし同時に、夫の態度に（苛立つ）

（いま）が語られていることは見逃せない。こうした現状をよく表した部分を、次に引用してみる。

・こんな事（論者注：妻にはかつて、夫より良いお相手との縁談があった事）はどうでもいいのですが、また、あなたに、ふふんと笑われますと、つらい

・あなた以外の人は、私には考えられません。いつもの調子で、お笑いになると、私は困ってしまいます。

・この世界中に（などと言うと、あなたは、すぐお笑いになります）私でなければ、お嫁に行けないような人のところへ行きたい

・この画は、私でなければ、わからないのだと思いました。真面目に申し上げているのですから、お笑いになつては、いけません。

二重傍線部をご覧いただきたい。ここには、夫の気を引こうと誇張された愛情表現が並んでいる。一方、それに対する（いま）の夫の反応は、傍線部に示した通り、ただ笑うだけである。なぜ夫は笑うのだろうか。それは、夫が妻を、自分より格下の存在だと見做しているからである。夫は自らのこうした優越感を隠すために笑う。ここで注意しておきたいことは、妻がこうした夫に気付いているということだ。それは、「いつもの調子で、お笑いになると、私は困ってしまいます」という言葉に明らかである。つまり、日頃の夫の反応を踏まえた確率の高い推測として笑いがあり、こうした推測をすること自体が妻の問題意識の表れなのである。そこに（苛立ち）を感じているからこそ、妻は夫の笑いを禁じようとする。

以上、①では、（夫とのなれそめから結婚）までを振り返りながら、

夫婦間の溝に妻が気付き、夫に〈苛立ち〉を感じていた〈いま〉が語られている。

②〈幸せな結婚生活〉

②は、「淀橋のアパートで暮した二箇年ほど」から「どうして、どうして」までの部分にあたる。そこでは、夫と「淀橋のアパートで暮した二箇年ほど」が、妻にとって何より「楽しい月日」であったこと、また夫が急に「偉くなって」、「楽しい事」も「私の、腕の振いどころ」もなくなったことが語られている。

では、②で想定されている語りの地点はどこか。②では、「いまは、だめ。なんでも欲しいものを買えると思えば、何の空想も湧いて来ません。」という言葉が見られる。また、「三鷹町の家に住」んでいることから、②で想定されている語りの地点は、①と同様、離婚を考えながらも決心がつかない時だとわかる。

だからこそ、「つぎつぎに私は、いいお料理を、発明したでしょう?」という言葉や、「それ（論者注・口下手で乱暴なかつての夫を指す）は、見せかけだったのね。どうして、どうして。」という言葉が見られる。そこには、当時を夫に思い出してもらいたいという妻の願いや、夫が変わってしまったことを受け入れられない思いが表れている。しかし、夫に対する妻の思いをより詳しくみてみると、①では〈苛立ち〉でおさまっていた感情が、〈不満〉に形を変えていることがわかる。それは、「あなたは、急にお口もお上手になって、私を一そう大事にして下さいましたが、私は自身が何だか飼いか猫のように思われて、いつも困って居りました」と語る妻に明らかだ。

以上のように、②では〈幸せな結婚生活〉を振り返りながらも、

夫に〈不満〉を抱えた〈いま〉が語られている。つまり、①の状況が深刻度を増した時が語られたのである。

③〈夫の成功で生じた夫婦の亀裂〉

③は、「但馬さんが個展の相談を持って来られた時」から「私は、不思議でたまりません。」までの部分にあたる。ここでは、「但馬さんが個展の相談を持って来られた時から」「おしゃれ」になって、どんどん成功していく夫が語られる。しかし同時に夫は、「毎夜」家を空け、女遊びをし、人の「口真似」ばかりして、人の「悪口」も言うようになり、金に汚くなった。そして妻は、「あなたのお為にも、神の実証のためにも、何か一つ悪い事が起るように、私の胸のどこかで祈っているほどになってしま」う。

では、③の〈いま〉とはどこか。③には、「いまに、きつと、悪い事が起る」、「あなたは清貧でも何でも、ありません。憂愁だなんて、いまの、あなたの、どこにそんな美しい影があるのでしょうか。」という言葉が語られている。つまり、③で想定されている語りの地点は、①・②と同様、離婚を考えながらも、別れの決心がつかない時である。

しかし、夫に対する妻の思いは、①・②と大きく異なっている。それは、これまで主に夫への愛情を語ってきた妻が、夫への冷めた気持ちを語り始めたことによる。妻は、夫が変わってしまった点を具体的に冷静に指摘し、意見している。たとえば夫が「お喋り」になったことについては、「人の言った事はかりを口真似しているだけ」と述べる。さらに「人が変わったように、お金の事を口にする」ことについては、「なんでそんなに、お金にこだわる事があるのでしょうか」

と述べる。また、夫が作った「新浪漫派」が、夫が馬鹿にしていた人たちの寄せ集めであることを指摘して、「嘘つき」「まるで御定見」がないと夫を「批判」している。ここから、①で「苛立ち」、②で「不満」、徐々にエスカレートしてきた妻の夫への思いは、③で勢いを増して「批判」となっていることがわかる。妻のこうした変化は見逃せない。なぜなら、別れの日が迫っていることを暗示しているからだ。

以上のように、③では「夫の成功で生じた夫婦の亀裂」を振り返りながら、夫への思いが「批判」にまで至った（いま）が語られている。

④〈別れの決意〉

④は、「ことしのお正月」から末尾までを指す。ここでは、「ことしのお正月」の岡井先生を訪問した日、そして「先日」の「ラジオ放送」を聞いた日が語られている。つまり、④で想定されている語りの地点は「先日」である。

では、④で語られた夫への思いはいかなるものか。妻は、岡井先生を訪問した日の夫について、「卑劣」、「氣違い」、「人間の誇りが、一体、どこへ行ったのでしょうか」と「怒り」を露わにし、別れを決意する。そこでは、③のように夫の悪い点を批判するのではなく、全人格を否定するまでに発展している。そして迎えた夫の「ラジオ放送」の日、ここでも妻は、「不潔に濁った声」、「くだらない」、「一体、何になったお積りなのでしょう」「恥じて下さい」、「あなたは早く躰いたら、いいのだ」と、感情を昂ぶらせて夫への「怒り」を露わにしている。夫に対するこうした妻の気持を、①～③と比べると、その違いは明らかだ。

以上のように、④では「別れの決意」を振り返りながら、「批判」が「怒り」に達した（いま）が語られている。また、語りの冒頭で、「私は、私のどこが、いけないのか、わからないの」と夫に問いかけていた言葉は、末尾で「私には、どこが、どんなに間違っているのか、どうしても、わかりません」という言葉に変わっていることも注目しに値する。それは、自分は間違っていないという妻の主張を感じさせ、語る中で別れの決意がさらに固まったことを感じさせる。

ここまで、妻の語りを詳しく見てきた。その結果、妻は夫との日々を振り返りながら、「苛立ち」、「不満」、「批判」、「怒り」といったように、冷めゆく夫への愛情を語り出したことが明らかになった。妻の語りは「おわかれ」にはじまり「おわかれ」に終わることから、従来、その心境には変化がないように捉えられがちであった。しかしそれは違う。繰り返しになるが、妻は夫との結婚生活を振り返りながら、冷めゆく夫への気持ちを語り出していた。それは、自らが整理した「夫との別れの物語」を語ることが、妻の語りの主眼であったことを意味する。このことは非常に重要である。もちろん、そこに反俗という目的はない。

では妻は、何のために「夫との別れの物語」を編み、語りだしたのか。次章ではこの点について考えていく。

四、〈成長〉する妻

妻が「夫との別れの物語」を語った理由を考察するためには、別れを決意した出来事について究明する必要がある。その出来事を指

摘すること自体は容易である。なぜなら、妻自身がそれを語っているからだ。別れを決意したその時は、岡井先生の家を出て、夫が「陰口」をたたいた時である。その部分をここに引用する。

先生のお家から出て、一丁も歩かないうちに、あなたは砂利を蹴って、ちえっ！ 女には、甘くていやがら、とおっしゃいましたので、私は、びつくり致しました。あなたは、卑劣です。たつたいま迄、あの御立派な先生の前で、ぺこぺこしていらした癖に、もうすぐ、そんな陰口をたたくなんで、あなたは、氣違いです。あの時から、私は、あなたと、おわかれしようと、思いました。

これを機に夫の人格を妻が否定し始めたことから、別れを決意した時はこの時に間違いない。

では、夫のこの態度がなぜ別れを決意させたのか。夫が陰口をたたいたのは、今に始まったことではない。それにも関わらず、妻はこれをきっかけに夫を見限り、別れを決意したのである。この点を考察した論は、管見によるところ一つも見当たらない。しかし、妻が別れを決めた理由は、語りの目的とも連動していて重要である。別れを決意した瞬間はなぜこの時だったのだろうか。

結論からいえば、その理由は岡井先生にある。妻の語りによると、岡井先生は画業で「有名な大家」で、「私たちの家よりも、お小さいくらいのお家に」住んでいた。そのことを妻は、「あれで、本当だと思えます」と高く評価している。これにとどまらず、岡井先生への妻の評価は、「本当に孤高」、「実に単純」で偽りがなく、「先生はどのおかた」といった言葉からわかるように、非常に高い。つまり、岡井先生は妻にとって〈有名な画家の理想像〉に合致した人物だっ

たのである。それはまた、妻が夫を評価するための比較対象を得たことを意味する。妻はここから、夫を相対的に評価することができるようになった。夫は世間で名の通った画家かもしれないが、超然としている岡井先生と比べ、世間体を気にして「大きいお家」に住んでいる。名ばかりの「知り合い」をたくさん作って、「自分の言葉」で語ることもできず、「陰口」をたたく。「お金の事」にうるさく、「毎夜」家を空け、女遊びもする。こうした夫の様子と岡井先生とを比べ、妻は〈夫の矮小さ〉をはっきりと実感したのである。その実感が確信に変わった瞬間こそ、岡井先生の前で「ぺこぺこ」していた夫が、先生の家を出ると「陰口」をたたいたその時だったのだ。

結婚当初、妻は夫を支えると決意した。だからこそ、成功して変わってしまった夫のことも、お金や地位が夫を狂わせているだけだと考えてきた。しかし、自らの〈有名な画家の理想像〉を体現した岡井先生に出会って、すべては幻想だったと気付く。夫が狂ったのは、夫の地金のせいなのだ。だから、夫との別れを決意したのである。また、夫と同列の但馬や葛西や兩宮では、夫の矮小さを実感することはできない。だからこそ、岡井先生を訪問した日が、別れを決意した日だったのである。

妻のこうした心境は、妻の「震え」からも確認できる（注13）。妻は、語りの中で四度震えている。一度目は、結婚を決意するきっかけとなった夫の画を見た時。妻は、「広い応接室の隅に、ぶるぶる震えながら立って、あなたの画を見ていました」と、その時の様子を語っている。二度目は、夫と実際に会って、結婚を決めた時。「私が紅茶の皿を持ち上げた時、意地悪くからだが震えて、スプーンが皿の上でかちかちや鳴ってひどく困りました」と妻は語る。三度

目は、夫の個展の成功を喜んで「全身震えながら、お部屋で編物ばかりしていました」という語りで、四度目は岡井先生の「眼」を見た時である。妻は、「あなたの画を、はじめて父の会社の寒い応接室で見た時と同じ様に、こまかく、からだが震えてなりませんでした」と語っている。ここから、この妻は、心が強く動かされた時に体が「震え」ることがわかる。大事なことは、四度目の「震え」を語る際に、妻自身が一度目と比較していることだ。つまり、夫との結婚を決意した時と同程度で、岡井先生の「眼」は妻の心を揺さぶっている。それは、岡井先生と出会った時の「震え」が、夫との別れを決意させるきっかけとなったことを意味している。

以上の通り、岡井先生の存在が夫との別れを後押しした。それはまた、妻自身が、人を見る目を養って〈成長〉したことを意味している。つまり、妻の〈成長〉が、夫との別れを決意させたのである。さらに、この決意を実行に移すと決断した時の心境こそが、末尾の「こおろぎ」と「きりぎりす」の転位に表われている。詳しく見ていこう。

それは、夫の「ラジオ放送」を聞いた「夜」「早く休」もうと「ひとりで仰向に寝てい」た時のこと。妻の「背筋の下で、こおろぎが懸命に鳴いて」いた。妻には、「それが、ちょうど私の背筋の真下あたりで鳴いているので、なんだか私の背骨の中で小さいきりぎりすが鳴いているような気がする」。さらに妻は、「この小さい、幽かな声を一生忘れずに、背骨にしまつて生きて行こうと思いました」と語る（注14）。

この場面こそ、小説「きりぎりす」において最も重要かつ謎めいた部分である。最大の謎は、「こおろぎ」が「きりぎりす」に転換

されること、そして何をしまうかにある。この問題に取り組んだ先駆者は、遠藤氏である。氏は『美しい人』である〈あなた〉を象徴する「こほろぎ」を信じて、「みずからの支え」とすることを決めたのだと解釈している。同様に、「こおろぎ」と「きりぎりす」に夫を重ねて読む論者には、高塚雅氏がいる。また、「あなたの画」に注目した読みとして、大國眞希氏は、「その芸術の本質だけはしっかりと、『私』へと受け渡され、その背骨に仕舞われた」と解釈している。一方、妻を重ねる論者の一人に、佐藤氏がいる。氏は「生きている証しとして、『小さい、幽かな声』で『懸命に』自分の存在を訴え続ける『きりぎりす』は、そのまま語り手自身である」と述べている。また、井原氏は、「〈国家〉の『音』ではない『幽かな声』を自らの『背骨にしまつて生きて行』く」決意をそこに読んだ。さらに川崎賢子氏は、高見順が「しきりに」言う「女のこわさ」を「臆病な読者による物語の平板なジェンダー化、一元化、一義化」だと批判したうえで、定義できない「こわさと共生しようとする私」を読んでいる（注15）。

本論では次のように考える。それは、夫でもなければ芸術でもなく、国家や「こわさ」と闘う「私」でもない。妻自身が、自らの気持ちを整理した心境こそが、「こおろぎ」の転換に託されているのではないか。

「こおろぎ」は「縁の下で鳴いている」。その「懸命」な鳴き声は、「私」の存在に気づいてと夫に訴えかける自分に何と似通っていることか。だからこそ、妻はその鳴き声に気づいたのである。

さらに妻は、この「こおろぎ」の声を、「小さいきりぎりすが鳴いているよう」に感じる。遠藤氏も指摘しているが、こおろぎの古

名はきりぎりすだ。つまり、今は「こおろぎ」とよぶ昆虫は、かつては「きりぎりす」と呼んでいた。

以上から、「こおろぎ」と「きりぎりす」にまつわる隠喩が明らかになる。夫に未練を残した妻は、「懸命」に鳴く「こおろぎ」の姿に重なる。しかし妻はそれをそのままにせず、「小さいきりぎりす」と捉えた。この転換にこそ、やはり大きな意味がある。なぜならそれは、夫への未練を抱えた自分を、かつてのものにしようとしたことを意味するからである。たとえ今は「小さく」「幽か」であっても、それは妻にとって忘れてはならない決意だった。だからこそ妻は、「一生忘れずに、背骨にしまつて生きて行こう」と思ったのである。背骨は体の中心を担う骨格であることから、それは、妻にとっていかに重大な決意であつたかがわかる。

以上が妻の語りの全貌である。そこからは、妻が何のために〈夫との別れの物語〉を編み、語りだしたのか、その理由が明らかになる。妻は、夫との五年間を振り返りながら、徐々に冷めゆく夫への思いを語った。その結末は、人を見る目を養つて夫との別れを決意したこと、そして、妻の心の底で鳴いていた「こおろぎ」の声を、いまや「きりぎりす」が鳴いていると捨て去ることによって、夫に未練を抱く自分を〈かつての自分〉にしようとした、というものであった。この結末こそ、〈夫との別れの物語〉を、妻が〈成長の物語〉として編もうとした証であり、これこそが、妻の語りの目的である。つまり、妻は〈夫との別れの物語〉を〈成長の物語〉として編み、語るることによって、さらに〈成長〉しようとしたのである。妻のこうした境地を尊いものだと感じていたからこそ、太宰はこの小説に「きりぎりす」というタイトルをつけたのではないだろうか。なぜなら

それは、生きるために行われる心の整理であり、自らと向き合うことでしか得られない境地だからである。

おわりに

従来「きりぎりす」は〈夫を通して〉妻の語りが解釈されてきた。そこに潜む、太宰を作品に重ねすぎる読者の意識や、女性に対する社会の根強い偏見も注視されるべきである。本論では夫に囚われず、〈妻の妻による妻のための語り〉という観点から、「きりぎりす」を再検討した。そこから見えたことは、「おわかれ」の要因が妻の〈成長〉にあり、この〈成長〉を糧に、更なる〈成長〉を望んだ妻の姿である。「きりぎりす」を含めて、太宰の女性語り作品は全部で十六作ある(注16)。「きりぎりす」のように、太宰治の表象に惑わされ、語り手の女性が軽視されている例は、他にもあるのではないか。作品の解釈の幅を広げるためにも、語り手の女性に真正面から向き合うことで、今後も太宰の女性語り作品を解釈し直していきたい。それはまた、太宰が女性語りを書き連ねた理由に迫ることになるはずだと考えている。

注

- 1 太宰治『太宰治全集第三巻』(一九八九年十月二十五日、筑摩書房) 内、山内祥史「解題」参照
- 2 相馬正一編『新潮日本文学アルバム19 太宰治』(一九八三年九月十日、新潮社) 内、相馬正一「略年譜」参照
- 3 山内祥史『太宰治著述総覧』(一九九七年九月二十日、東京堂出版) よ

- り引用。初出は、平野謙「混濁と稀薄川作家精神の在りやう」『文芸時評』④（『都新聞』第一万九千四百四十四号、昭和十五年十月三十一日付発行）。
- 4 山内祥史『太宰治著述総覧』（一九九七年九月二十日、東京堂出版）より引用。初出は、高見順「反俗と通俗」『文芸時評』①（『文芸春秋』第十八巻第十五号、昭和十五年十二月一日付発行）。以後の高見の引用もすべてこれによる。
- 5 太宰治『太宰治全集第十巻』（一九九〇年十二月二十五日、筑摩書房）井原あや「あなた」と別れるということ——太宰治「きりぎりす」をめぐって——『言語と文芸』二二四号（二〇〇八年三月三十日、おうふう）。以後の井原氏の引用もすべてこれによる。
- 7 遠藤祐「背骨」のなかでうたうもの——「きりぎりす」を読む——遠藤祐『太宰治の「物語」』（二〇〇三年十月十日、翰林書房）。初出は、『宗教と文化』18号（一九九七年三月、聖心女子大学キリスト教文化研究所）。以後の遠藤氏の引用もすべてこれによる。
- 8 太宰治『太宰治全集第一巻』（一九八九年六月十九日、筑摩書房）。書誌は山内祥史「解題」より。
- 9 太宰治『太宰治全集第七巻』（一九九〇年六月二十七日、筑摩書房）。書誌は山内祥史「解題」より。
- 10 太宰治『太宰治全集第八巻』（一九九〇年八月二十五日、筑摩書房）。書誌は山内祥史「解題」より。
- 11 佐藤厚子「太宰治「きりぎりす」論——（気付き）としての（語り）——」山内祥史編『太宰治研究6』（一九九九年六月十九日、和泉書院）時系列によって語りが整理されていることは、井原あや氏も指摘されている。
- 13 「震え」については、大國真希氏も指摘されている。「太宰文学における〈幽かな声〉と〈震へ〉あるいは色彩と音——「きりぎりす」を中心に」斎藤理生・松本和也編『新世紀 太宰治』（二〇〇九年六月十九日、双

- 文社出版）をご参照いただきたい。
- 14 「源氏物語」総角に「壁の中のきりぎりす」という話がある。太宰の「きりぎりす」にも通ずる部分があるため、関連性についていずれ考察したい。詳しくは左記をご参照いただきたい。
- 15 遠藤氏／注7に同じ。
- ・高塚氏／高塚雅「太宰治『きりぎりす』論——〈語りの場〉の在りかを巡って——」『中京大学文学会編『中京国文学第三十号』（二〇一一年三月十五日、中京大学文学会）
- ・大國氏／注13の文献に同じ。
- ・佐藤氏／注11に同じ。
- ・井原氏／注6に同じ。
- ・川崎氏／川崎賢子「太宰治『きりぎりす』論——「あり」と「こほろぎ」と「きりぎりす」——声と変態」『至文堂編『国文学 解釈と鑑賞 第七六巻六号』（二〇一一年六月、ぎょうせい）
- 16 東郷克美「女性独白体の発見」『太宰治という物語』（二〇〇一年三月三十日、筑摩書房）。初出は、『太宰治の話法——女性独白体の発見——』『日本文学講座6』（一九八八年六月、大修館書店）。
- ※ 「きりぎりす」本文は、太宰治『太宰治全集第三巻』（一九八九年十月二十五日、筑摩書房）によった。旧字は新字に改め、ルビは省略した。
- ※ 本論は、日本近代文学会関西支部二〇一五年度春季大会（六月六日、於武庫川女子大学）における口頭発表をもとに加筆修正したものです。発表当日、貴重なご教示を賜った方々に心より感謝申し上げます。

（やまだ・かな 本学大学院博士後期課程）